

京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科
フィールドワーク・インターンシッププログラム 2011 年度 JASSO 派遣報告書

報告者氏名 稲角 暢

平成 23 年度 (入学)

1. 研究課題:

牧畜民による日帰り放牧の成立機構とその現代的变化に関する研究

2. 派遣期間:

平成 24 年 1 月 10 日 ~ 24 年 3 月 14 日 (65 日間)

3. 今回の派遣により、申請時に自身の目的としてあげた点について得られた知見を述べてください

申請時のこのフィールドワークの目的は、2011 年 8 月~12 月に行う語学研修と予備調査に基づき、ケニア・レンディーレのラクダ放牧群の実態、および放牧管理に関する技術と知識を調査して、家畜の群れの日帰り放牧の成立機構を明らかにすることであった。また、私の研究の目的は、家畜の群れの日帰り放牧の成立機構を明らかにした上で、牧畜社会の現代的变化にともなって、人と家畜の関係がどのように変質しているのかを探ることであった。

申請時以降、対象民族をレンディーレ人から同じケニアのポコット人に変更したものの、行った調査は上の目的に沿うものであった。ポコット人のウシ・ヤギ・ヒツジ・ラクダ・ロバという五種の家畜について、管理方法を聞き取り、および放牧群の追従によって調査した。そして、ポコット社会の現代的变化に伴い、人々の町周辺への定住が進行し、それに従って、家畜管理のあり方、人と家畜の関係に変容が見られることが明らかとなった。

4. 自身の今後の海外への渡航や留学に向けた課題や展望について

修士論文執筆のために、今年度(平成 24 年度)前半に、再度ケニア・ポコットへ 3 ヶ月程度渡航する予定である。本プログラムの今年度の申請に先立って出国することとなりそうである。修士論文執筆後も引き続き同地でのフィールドワークを行うつもりだ。

課題・展望としては、調査地域 Tangulbei 周辺の地域社会における現代的变化を定住・家畜管理だけでなく、経済、農業導入、教育、紛争などの観点から包括的に調査し、地域研究としての全般的調査をより進めていくことである。

5. 本プログラムに関して意見をお聞かせください。また、今後どのような留学プログラムがあれば参加したいですか?

本プログラムは、渡航期間中の行動について、計画の段階から自己裁量に任されている点で、個人の自由度が高く、フィールドワークという多様な姿を持つものに対する適応性が高かった。引き続きこのようなプログラムが継続されることが望まれる。

今後の留学プログラムとしても、ケニアでのフィールドワークを自由に継続できるようなプログラムや、語学力向上のためのプログラムがあれば、参加したい。

署名